奈良郵便局建設用地 平城京 左京三条二坊六坪

発掘調査現地説明会資料

日時　昭和50年12月6日　午後2時
場所　奈良市尼ヶ辻町ゴドサ甲669の1

近畿郵政局
奈良国立文化財研究所

調査経過

本調査は、奈良郵便局の庁舎建設用地（奈良市尼ケ辻町ゴドサ甲669の1）において、事前調査として実施したものである。調査は、近畿郵政局の依頼により、奈良国立文化財研究所が行なった。

この地域は、平城京左京三条二坊六坪に相当する。平城京の発掘調査は近年とみに進捗し、朱雀大路（奈良市・1973～1974）、左京三条二坊十・十五坪（奈良市庁舎建設地・1974）、左京五条一坊四坪（県警柏木基地・1974）、左京八条三坊（県営団地建設予定地・1975）などで、京内の大路、小路、坪の区画、坪内の宅地割りなどがかなり明確になってきた。今回の調査地は六坪内の中心部にあたり、坪内の様子を知る意味で重要な遺構である。

調査は、まず敷地全体の遺構の残存状況を確めるため、予備調査として、昭和50年5月30日～7月9日まで、本敷地内の南端に70m×5mの東西トレンチ、東端に90m×5mの南北トレンチを各1本いれた。その結果、敷地中央東寄りで園池の一部と、これを画すると思われる柵、および旧河川跡を検出し、西方では数棟の掘立建物を発見した。このような予備調査の所見にもとずき、池の全容、坪内の建物配置を明らかにするため、昭和50年10月13日より本格的な調査（調査面積3400㎡）を実施した。

遺構の概要

検出した主な遺構は、園池1、建物8棟、塀4条、旧河川1条、井戸1基などである。

六坪のほぼ中央部に、奈良時代以前に西北から南へ流れる河川SD24があり、この河川の流路を利用して、奈良時代に園池SG30が造成された。川は、京の造営に伴なって、現在の菰川の位置、すなわち左京三条二坊の坊間路の道路添いに掘河の役目をもたせるべく流路を変更したものと思われる。園池への導水は、変更河川路（菰川）から導水路SD18により引いた水を池の手前の溜りにいれ、木樋暗渠SX17により導いている。導水路と新河川路（菰川）との接点には堰のような施設が設けられたものと思われるが、今回の発掘はその地点へ及ばなかった。木樋暗渠は、長さ5mの一木（幅12cm、深さ10cm）を凹型にくり抜き、上に木蓋をのせる。木樋の溝は先端（北端）では木口まで達せずに止っており、1mほど露出させて、導水は端近くで蓋をくり抜いた部分から上面でそそぎ入れる構造になっている。なお取入口には、木樋の両わきに1mの間隔で2本の小角柱が検出された。導水のための施設であろうがその構造の詳細は知り得ない。木樋暗渠から導いた水はいったん石組坑SX16に滞水させたのち、池中へ流している。園池（SG30）は幅15m、延長55mあり、池全体を石組みで固める。曲池のような形で迂余曲折し、溢水口、導水口から判定すると水面は幅の広い所で5m、平均3m前後で、水深は、水面の広い所で最も深く25cm、平均20cm位の浅いものと考えられる。水際は15°ぐらいのゆるい勾配で、幅20cm前後の偏平な玉石を敷きつめている。玉石に続き、池の周辺にはこぶし大の礫を並べ地表を保護している。石敷は、曲部、あるいは水面が狭くなる部分で、幅広く敷きつめている。池底に接する所は、一列に玉石を立てて据え、池底も水際同様の石で敷きつめている。庭石は、水蝕ある褶曲をもつ石英質片麻岩を水辺に、花崗岩、一部安山岩などを陸に使用し、池汀の変化する突出部や湾曲の開始される点などに集中して配置し、自然順応の趣きを見せている。細部意匠として、SX15は、池縁から直角に陸に向って両側に玉石を幅1.2m、長さ4mで並べる。これはSB05に近接し一見後世の舟入りの施設を思わせる。また、SX20は、池底に木組で仕切りを拵えたもので、恐らく水生植物の栽培施設であろう。池の排水は、西南部に階段状に石を畳んだ溢水溝があり、南へ伸びてSD14につながる。溢水部の下には、外法寸法20cm×20cm、長さ2.5mの木樋SX22が貫通し、排水溝に開口する。構造は、取入部の木樋と同様、蓋先端部に径12cmの丸い穴を穿っている。木樋は池の水を抜く際に用いられたものであろう。

この園池をとりかこむ形で、塀が4条、東西南北にある。北塀SA12は池の北端にそってあり、柱間は7尺等間である。西より3間目のみ10尺で、SA11とも関連し、開口部になるとみられる。東塀SA13は北塀に続き、7尺等間である。南塀(SA10)は10尺等間で、池のほぼ南限で池より西に伸びる。西塀は上記3面とはやや異なり、建物の間にだけ設けたもので、4間分7尺等間である。これらの塀は、いずれも坪のセンターより70尺の距離に位置し、池を囲んでいる。

建物は、池の北・東に東西棟がそれぞれ1棟、池より西には6棟の建物がある。西側の建物はいずれも南北棟である。うち、SB05、SB06、SB02の3棟が、柱位置が揃うなどの状況から池を囲む四周の塀と同時期に計画、造営されたものと認められる。SB02の廃絶後、礎石建物SB01がつくられ、SB05の廃絶後にSB03がつくられる。なお、SB01は、奈良時代後葉の土器を含む整地層の上にある。

遺物の概要

遺物は発掘区域全域から出土している。須恵器、土師器、瓦塼類、木製品などがあるほか、SD18からは木簡が多数出土した。

土器：SD18からは、木簡とともに奈良時代前半の土師器が出土しているほか、井戸SE23の埋土からは、井戸の廃絶の一端を示す平安初期の土師器が出土している。さらに池埋土からは、池の下限を示すものとして奈良末の土師器杯、須恵器大型甕が出土している。

瓦塼類：約50の軒瓦が出土した。軒瓦は平城宮使用の軒瓦と同型式のものであり、年代的にみると平城宮瓦編年による第Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間）に属するものが多く、それ以前の藤原宮式軒瓦も若干出土している。なお、池、井戸の付近からは、塼が多量に出土している。

木製品：SD14から人形、削り掛け、SD18の埋土から黒漆塗の容器蓋、人形、糸巻きの横木、鋤の把手、匙、曲物の蓋・底板が出土している。また、SB04の柱抜取穴から布片が出土している。

木簡：SD18（導水路）堆積土下層より、多量の加工木片とともに56点の木簡が出土した。その主なものの釈文は下記の通りである。

1.「阿波國長郡坂野里百済部伎弥麻呂」　（188）×16×5㎜ 6039型式

2.
- 「椋マ智麻呂　高椅善麻呂　越越」
- 「身身身□□　人人人人人人人　」　（214）×25×6㎜ 6011型式

3.
- 「御坏物直米二升充奉　」
- 「□古女　九月三日 椋垣忌寸」　（160）×20×3㎜ 6019型式

4.
- 「五百卌二
  一校授　」
- 「二百七十　卌旦」　（173）×50×15㎜ 6081型式

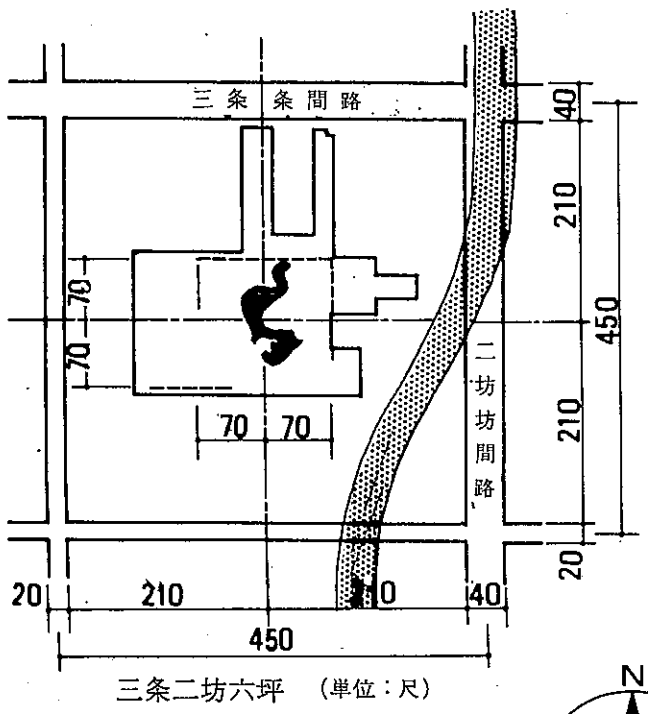
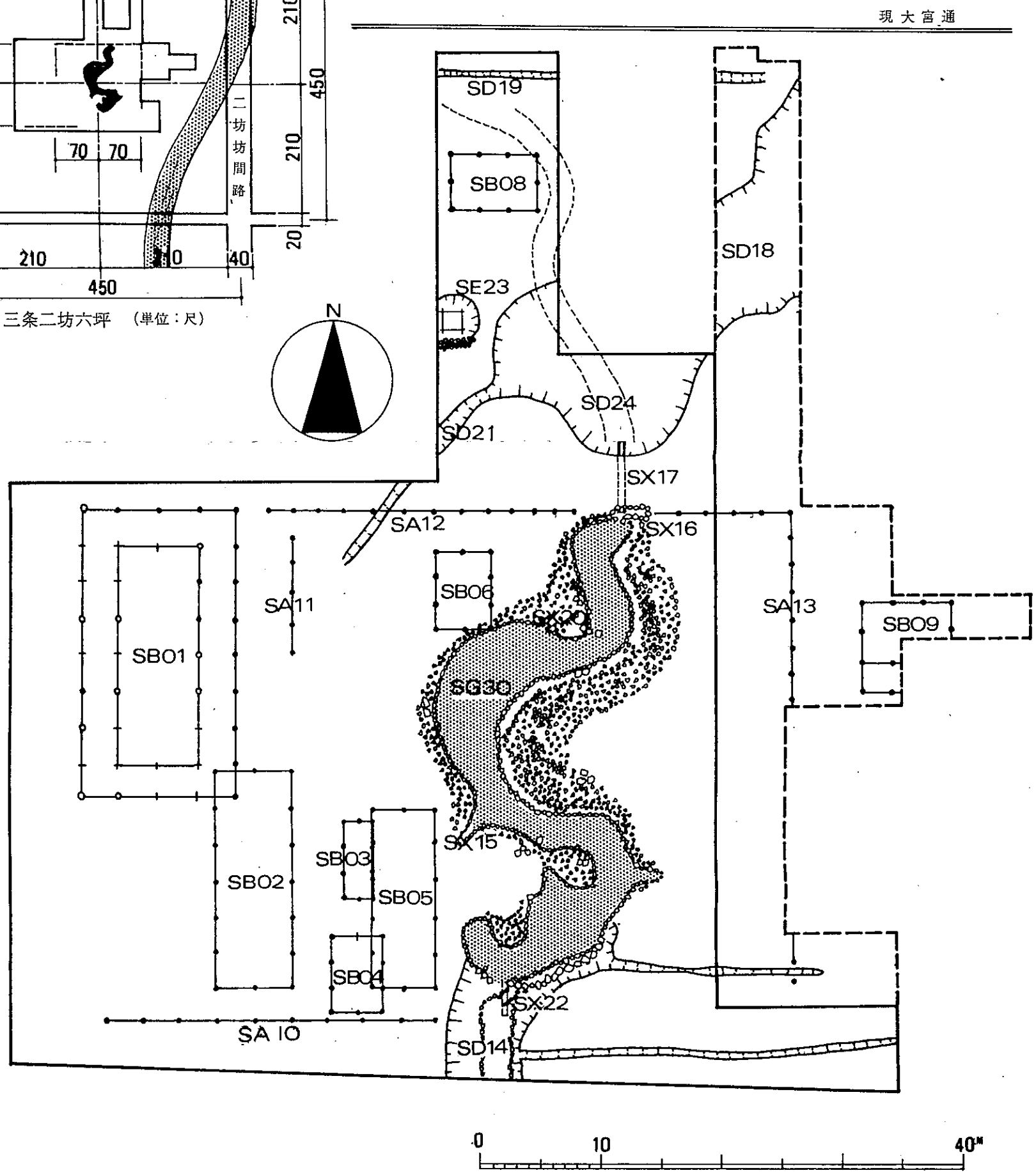
5.
- 「若□國 小丹生郡野里 中臣マ乎万呂 御調塩三斗」
- 「和銅五年十月　」　（172）×21×5㎜ 6031型式

6.「田寸里日下マ否身五斗」　（164）×23×4㎜ 6033型式

まとめ

園池は平城京造営以前の河川路を利用して、左京三条二坊六坪の中心に造成されており、園池をかこむ塀は、坪の中心より各70尺離れた位置に設けてある。この坪は北が三条々間路（側溝間距離40尺と推定）、東が二坊々間路（同40尺）、西および南が坪界小路（20尺）と考えられるので（溝間距離は近年の京内発掘成果による）、坪の地割は方420尺即ち70尺×6となる（別図参照）。その点で園池と塀がきわめて計画的に配置されていることが知られ、京内宅地利用の一基準を示すこととなろう。

園池の造営は、導水路SD18から出土した木簡、池中の遺物、西側に併列する建物の編年から、奈良時代初頭にさかのぼり、奈良時代末期まで存続したことが判明する。園池は導水口、排水口の施設およびその形態などから考えると、曲水の宴にも利用されたものであろう。塀内の建物はすべて南北棟であるのは、近年の京内宅地の発掘で東西棟が大多数を占める知見と相反するが、ここでは園池を東方にみる配置であること、さらには園池の後方の東山を借景にとりこむ構想になっていることと関連しよう。なお第Ⅱ期の礎石建物は唐招提寺講堂（もと平城宮東朝集殿）に匹敵する大規模なもので、もし住宅とすれば従来京内で検出された中では最大クラスである。

この地が宮城に近い場所であり、園池の規模、形態なども併せ考えると、高位高官の貴族の私宅にかかわる遺構であるか、あるいは「続日本記」にみえる曲水宴の公的施設の可能性も考慮にいれておかねばならない。因みにこの地の南の左京四条二坊には、藤原仲麻呂の田村第や造東大寺司長官市原王の邸宅の所在することが知られている。

平城京左京三条二坊六坪
発掘遺構配置図